



## 「流通」と「配給」

「人々の日々の暮らしが姿を消し、『お国のために』が前面に出て来たとき、戦争が始まった。流通が消え、配給が登場した」。

「防衛拡張論」を開陳するや「異議あり」と声を上げます。

「貴方の会社は軍需産業として儲かるでしょうが、我々は堪ったものじゃない。日本は貿易を通じて東西の架け橋になるべきだ。貴方は息子さんが戦争に行つて戦死してもいいのですか。大東亜共栄圏建設の美名の下に侵略の過ちを犯し、朝鮮半島、中国、アジア各国を侵略した過去を知らないとは言わせない」と58歳の彼は一人気を吐きます。

20歳で召集・配属された満州及びフィリピンの飢餓戦線。「腹一杯すき焼き食いたい」と家族で食卓を囲む光景を幾度も夢想し、生還した旧大日本帝国陸軍二等兵は「時代と共に変わる『よい品』を、だれでも、いつでも、どこでも、欲しい量だけ買える仕組みを作る」信念の持ち主でした。

2005年に83歳で逝去。「主婦の店・ダイエー」創設者中内功氏の警句です。1981年に関西財界セミナーで日向方齊・住友金属工業会長が徴兵制導入を含む

40年近く前に招かれて何年か毎月、お互いが捉える社会状況を語り、社内外の流通の現場を視察した僕は、2000年に「私の履歴書」でも述懐の持論「作る側・売り手側」が『この牛肉はうまいよ』と薦めても、主婦が自分で食べて口に合うかどうかで買う買わ

ないを決める。ささいなことだが、日々の暮らしの中で主体性を持つて商品を選択し結果に責任を持つ。『自主自律、自己責任』の原則こそが、『大和魂さえあればなんでもできる』式の精神主義の蔓延を防ぎ、世界の孤児への道を二度と歩まない基盤となる』の警咳に接します。

自身と思しき詩人で百貨店主が主人公の小説『いつもと同じ春』上梓の1983年、「私には資本主義社会、自由主義経済をより良く正すトロツキストとしての役割が課せられているのかも知れませんがね」と僕に呟いたのがセゾングループの堤清二氏。鏑を削る、好敵手」と表層的には捉えられ勝ちだった二人は晩年、消費者の低価格志向に対応し、スケールメリットを追求する流れは産業の『見えない化』ではと懸念し合います。

曰く、「人間の存在価値を掘り下げて、資本の論理だけに換算されない新たな商品・サービスを提供すべき流通産業は、世の中の流れと違うことを考えないと駄目」。「なのに、最近では流通業界も話題がM&Aばかりだ。何でも金銭という数字に置き換えてい

くのはどうなんだろう」と。飯令「売場の牛乳一本」と雖も自分の買いたい品を自分で選ぶ事の悦びを、物やサービスの提供を通じて叶えようとした「流通革命」の中内氏。「武器と麻薬と売春だけは決して扱わない」と事ある毎に発言していた堤氏。

『使う側・買手側』の立場に立つ事に目覚め、成熟していく筈の消費者が、豈囃らんや、矜恃と諦観としての『自主自律、自己責任』の認識が稀薄だったが故に、「だれでも、いつでも、どこでも、欲しい量だけ買える『相互扶助』の仕組み」とは裏腹な「気紛れで我が儘な消費者」へと変容していく時代の潮流の中で、両氏は藻掻き苦しみます。

経済は歴史現象、科学も自然現象。故に二度と同じ事は起こり得ず。にも拘らず経営も政治も、戦争も紛争も、全ての起こり得る事は演算装置のアルゴリズムで解析可能、と端から信じて疑わぬ米欧「公理主義」請け売りな「データサイエンス誤用学捨」誤送船団マスメディア」が跳梁跋扈。「配給の途」へと一瀉千里な誰そ彼ニッポンです。

★次号08月号の発行日は7月28日(金)です。